

入学者のことば

入学者の言葉

歯学科1年 岩上尚暉



早い。非常に速い。早くも入学してから3カ月以上も経ってしまいました。楽しい時間というものがあったという間に過ぎてしまうもので、もうそんなに経ったのかと驚いています。今頃

はもう皆さん、夏休みの計画を立てたり、デンタルの練習で忙しい頃でしょうか。

さて、私の自己紹介を忘れていましたのでしておきましょう。冒頭に名前は書いてあると思うので必要はないですが、岩上尚暉と申します。出身は埼玉で、現在はバスケット部とゴルフ部に所属しています。

出身が埼玉なので、当然今は一人暮らしなのですが、皆さんは一人暮らしにはもう慣れたのでしょうか。私は、料理や洗濯もしたことがなかったので、いまだにいろいろと苦戦しています。特に一番苦戦しているのは料理です。料理の基本のキの字も知らず、調理方法が原始人レベルなので、切ると焼くという2つの方法のみで3カ月間乗り切ってきました。この前はためしに余っていたバナナをフライパンで焼いてみましたが、見るも無惨な姿に変化を遂げてしまいました。もこみちは凄いなあと痛感した3カ月でした。

話は変わりますが、皆さんはこの3カ月楽しかったでしょうか。私は非常に楽しかったです。入学当初は、皆緊張していて殺伐とした空気が流れていました。そのため、ここで友達は作れるのだろうかと不安でしたが、話しかけてみると皆意外と気さくですぐに友達ができました。やはり、高校と大学で一番違うなと思ったのは積極的に行動することの大切さです。大学では高校ほど学校

で縛られる時間が多くないため自由に行動する時間ができます。一方で、一緒にいる時間も短いため、積極的に行動しないと関係が作れないのだなと感じました。また、これは人間関係だけではなく、授業への姿勢も同じで、自分から情報を取りにいかないと高校の時ほど一方的に何かを与えられる機会は少ないのだなと感じました。私にとって、この3カ月間は短いようで非常に濃密で学ぶ機会の多いものでした。

今はまだ我武者羅に毎日を過ごしていて、先のことあまり見えません。しかし、早期臨床実習や先輩とのかかわりの中で、歯科医になるという最終的な目標は前よりももっと明確になった気がします。計画性を持って物事に取り組むことは重要ですが、あまり先のことを考えすぎても先の見えない現代においてかえって行動を邪魔するかもしれません。明日は明日の風が吹くとも言います。今はまず、周りを見渡しているいろいろなことを経験し吸収していくことが先々で柔軟に動くための糧となるかもしれません。

入学者の言葉

歯学科1年 長島大貴

皆様、初めまして長島大貴です。季節も夏本番に差し掛かり皆様はどうお過ごしでしょうか。私は、大学に入学したら今までやってこなかったことに挑戦しようと考えていました。中学校の時は、水泳部に入部し、部活の時間が楽しみで、毎日部活に明け暮れていました。高校では競技かるた部に入りました。理由は単純です。映画「ちはやふる」にあこがれていたからです。しかし、入部してみると、思っていた以上にかかるたは大変なものだと知りました。まず百人一首の上の句と下の句を覚え、さらには場にあるかるたの札の配置も覚えなければいけません。比較的、暗記

が得意だと思っていた私でもとても大変でした。高校では運動部に入らず、さらに大学受験もありストレスから暴飲暴食をしまい普通に太りました。さすがに痩せなければならぬと思い、大学では運動部に入ることをこのころから決めていました。そして、大学に入り私はソフトテニス部と軽音部に入部しました。ソフトテニス部は歯学合同で人数が多く、さまざまな人がいて楽しいです。軽音部は先輩のギターソロにあこがれてギターを始めました。軽音部も先輩がたくさんいて、全員が明るい感じでとても楽しいです。

ここまでは部活について話しました。これから、リアルな大学生活について書いてみようと思います。まず大学生活が始まってはや三か月が経過しました。授業はほとんどがオンラインです。そのため、学部によっては同じ学部の人とのかかわりがほとんどないという人もいます。幸いにも、歯学部の前期は毎週金曜が対面の授業で、週一でみんなに会うことができます。歯学科男子は仲が良く、一緒にご飯を食べに行くことも多々あります。私はこの前の7月1日で19歳をむかえました。たくさんの人に祝っていただきました。1日から三日連続で、友達から祝ってもらい今までの人生で一番幸せな誕生日を過ごすことができました。最高の同期を持ったので誰も留年せず、この58期は全員で卒業したいと思います。

最後になりますが、受験期に私を支えてくださった高校の先生や仲間、そして両親に対してこの場を借りて感謝申し上げます。またこれから順調にいけば、六年間お世話になる歯学部の先生方、よろしくお祈りします。私たちも全力で学ぶので、熱心な指導、そして授業をよろしくお祈りします。

勉強と感謝

歯学科編入2年 坂井幸介

「次は終点、新潟、新潟。お忘れ物のないよう…」。

うつらうつらとしていた私の耳に車掌のアナウンスの声が届く。新幹線を降り、スーツケースを

転がしターミナルに着きタクシーに乗り込んだ。

入学式前日、4月3日。新居へと向かう車中で私は、私にとって二度目となる大学生活への大きな期待感を抱いていた。

以前の大学では物理学を専攻しており、医者家系でもない。小学生の頃はプロ野球選手、中学・高校生の頃は歌手、大学生の頃は漫画家となることを夢見ていたが、結局何者にもなれず一般企業に就職し社会人として3年を過ごしていた私が、今まで全く縁のなかった歯学部への編入学を志したのは前年の6月であった。

翌4月4日、入学式は生憎の雨天だったが、改めて私は自身が再び大学生になれること、そして高い志を持って学業に励めることに晴々とした気持ちだった。

というのも、これまでは能動的に勉強することはほとんどなく、高校では大学受験のために、大学では単位取得のために勉強を「しなければいけない」、もっと言えば「させられている」と思っていた。しかし社会人となり勉強から離れると、今度は初めて「勉強をしたい」という気持ちに駆られた。だが、仕事に追われる忙しい毎日の中ではなかなか勉強する時間が取れず、そのとき初めて今までの自分が「勉強をさせられていた」のではなく「勉強をさせてもらえる」という恵まれた時間と環境を与えてもらっていたことに気づき、両親への感謝の気持ちを今までにないほど抱くと同時に、それを有効的に活用できなかったことをとても後悔した。

そんなとき偶然、歯科医師の方と知り合い仲良くなった。その方から歯科医師という職業の素晴らしさを教えてもらった。人間が生きていくのに必要不可欠、かつ美味しいものを味わうことで人生を豊かにすることができる「食べる」という行為を、歯や口腔をケアすることによって支えていくという社会的意義はもちろんのこと、何より私の心に響いたのは、歯科医師は常に新しい知識や技術を勉強し吸収することが必要で、それを患者を通して地域社会に還元していくことができる、ということである。誰かの役に立てるような勉強こそまさに私のしたかったことだと気づき、私は新潟大学を再受験することを決心した。

本文を執筆している7月頃は中間試験がいくつもあり、授業と勉強に追われている日々が続いている。正直、大変だ。しかし、私にとって新しいこと、今まで知らなかった世界を知ることとはとても面白い。これからどんどん新しいことを学んでいけることへの期待感に満ちている。

普通は、二度も大学に通わせてもらえることなど滅多にないと思う。そんな機会を与えてくれた両親には感謝してもしきれないし、それに応えるべく勉強に励んでいかなければならない。

次第に見慣れてきた新潟の街並みのなかで、大きく息を吸い込んだ。

入学者のこぼ

口腔生命福祉学科1年 山内 丈音



新潟大学歯学部に入学会してあっという間に3か月が過ぎようとしています。まだまだ入学してすぐの気持ちの抜けきっていないのですが、1年生の4分の1が終わったと考えると正直少

し焦りが出はじめています。このスピードで大学生活4年間が過ぎていくと考えると自分は何を大学生活4年間の指針としてゆけば良いのか早く決めたいところではありますが、焦らず大学生活を過ごしていく中で模索したいです。

さて、高校生の時コロナ禍で大学では非対面授業をしていると噂で聞いていましたが、今年もそうなるとは思っていませんでした。「思い描いていた大学生活と違う！」と高校生のとき先輩から聞いていましたがまさにその通り！しかし大学生になれた喜びからZoomでも何でも楽しく感じられるものです。対面授業が拡大すれば、それはそれで面倒になるのだろうか考えると、わがままになったものだと思うばかりです。

このような世間的には楽しくない(!?)と思われるがちな大学生活ですが、1つ楽しみなことがあります。それは旭町に週1回通学したときに、友人と古町にランチに行くことです。歩けばすぐお

しゃれなカフェが見つかるこの町で、新しいお店に行くことが最近の1番の楽しみです。つい先週も古き良き喫茶店にお邪魔しました。友人とおしゃべりをして、食事、食後のコーヒー、プリンを楽しんだら、あっという間に12時45分!! 急いで午後の授業に向かいました。旭町の雰囲気がとても気に入って、この後4年間大学生活を送れることが本当に楽しみです。

入学したばかりの頃は歯学部の仲間とうまくやっていけるのか不安でしたが、口腔生命福祉学科の人はもちろん、歯学科の人もとても暖かく接してくれて、今では歯学部で受ける授業のときに安心感がありとても好きになりました。学年が上がるにつれて試験勉強などについてお互いに助け合ったり、励まし合うことが重要になると思います。19期の同期の仲間となら乗り越えられるだろうと思います。同期を大切に、人間的に成長する4年間にしたいです。大学入学まで支えてくださった方々とこれから大学生活を送る上で関わる方々への感謝と、この学科を受験しようと決意したときの初心を忘れず、謙虚に、素直に、大学でたくさんのことを吸収し、理想に近づけるように精進したいです。

入学者の言葉

口腔生命福祉学科1年 片岡 綾音

わたしが新潟大学に入学会してから約三ヶ月がたちました。大学入試を終えてから今日に至るまでは、あっという間のような気もしますが、とても濃い期間でした。共通テストを終えてから怒濤の日々がスタートしました。まず、共通テストで思うような得点が出来ず、志望していた学部を諦めてしまうのか、それとも今までの目標を貫き通すのかという大きな選択をしなければなりません。この時期は本当に自分が何をしたいのか、どうしたいのかを考えなければならず、かなり辛い時期でした。どうしようかと考えているうちに全く知らなかった口腔生命福祉学科という選択肢に出会ったのですが、一人暮らしなんてしていいのかという不安、今まで目標としていた学部と

はかけ離れた勉強内容についていけるのかという不安もあり、本当にここに進学してもよいのかとたくさん悩みました。総合的に考えて口腔生命福祉学科を受験することにしましたが、受験を決めて無事合格をしてからもたくさんの不安は残ったままでした。

合格通知が届いて引っ越しが完了した後、生活はガラッと変わりました。友達もほとんどいない、全く知らない土地で、さらに今までずっと一緒に過ごしてきた家族と離れての生活は経験のないことの連続で、最初は毎日の生活を送るのに精一杯の忙しい日々でした。わたしは親の転勤で何度か転校や引っ越しを繰り返してきました。家が変わるたびに友達や周りの環境が変わることはあったけれど、家族はずっと変わることがなかった唯一の存在で、その存在がいなくなった生活は自分の中でかなり辛い日々でした。この短い期間の生活でも、周りの人たちの協力がたくさんあって今までの生活が成り立っていたことを実感させられました。

今では最初の怒濤の日々は過ぎ去り、少し生活にゆとりが出来てきて新しい友達が増えたり、学校で新しい知識を学んだりしていて、前の自分が抱えていた悩みは必要なかったかなと感じています。口腔生命福祉学科での学習は、毎回新たな発見をすることが出来、興味が深まっていくので、わたしの選択は間違っていなかったなと思います。一人暮らしや初めてのバイトなどを経験して、より広い視野を持つことが出来ています。

わたしは4月からの生活を経て、これからの時代は不明瞭なことが多く、先の見えない生活が続くかも知れないけれど、自分が置かれた状況の中で出来ることを探して、決断して、行動することが大事なんじゃないかと考えるようになりました。どんな状況におかれてもよく考えて選択して、そこで少し大変でも耐えてやれることをやってみることを繰り返すことの大切さに気づくことが出来たこの経験は、これからの将来にもつながっていくと思います。このことを忘れず、これからも充実した日々を過ごしていきたいです。

入学者のことは

口腔生命福祉学科編入3年 千葉 榛 夏

入学して3か月が経ちました。私は今年の3月に宮城県の専門学校を卒業し、歯科衛生士の免許を取得して大学に編入学しました。

私が編入学を考えたのは、摂食・嚥下の講義を受けたことがきっかけで高齢者の口腔ケアに関わる歯科衛生士になりたいと思ったからです。それには対象者の方とうまく関わっていくために高齢者の知識を増やして、その方が抱える身の回りの問題や、心理面に関してのサポートも必要だと感じました。摂食・嚥下を学ぶ前は大学に進むという選択は考えていませんでしたが、この分野に力を入れている学校で尊敬する先生からたくさんのことを学び、そこに関わる歯科衛生士の可能性に気づいて、先生のようにその分野に精通した歯科衛生士を目指しているんなことに挑戦していきたいと思いました。そうすることで自分のできることの幅を増やし、高齢者のみならず様々な人に医療と福祉双方の視点からアプローチすることができると思ったので、編入学を決意しました。

宮城から新潟へ親元を離れての一人暮らしに不安を抱えながらのスタートでしたが、一緒に編入学をして福祉を学ぶために新たに同じスタートラインに立った仲間や、クラスみんなはとても親切な人ばかりです。新潟のことをいろいろ教えてくれたり、分からないところをみんなで共有しながら勉強に励んでいます。入学してすぐに福祉に関する講義が始まったり、施設への見学実習に行ったりと、とても学びの多い毎日を送っています。福祉に関する講義は難しいと感じることは確かにありますが、今後増え続ける高齢者に関わる分野には重要な内容なのだと思います。これから自分が口腔ケアを行っていくことを想像し、どんな支援を行っていけるかの可能性を見出していきたいです。また、同時にコミュニケーションを学ぶことで今までとは違った自分になれるのではないかと、とても楽しみにしています。

新潟大学に入学して、新しいと感じたのがPBLです。意見を出し合いながら議論を深めていくことで、考える力が着実に付いていると感じます。また、講義のように聞くだけでなく、議論した中で分からなかったことをグループ学習という形で調べる過程があるので、自分が分かるまで納得のいく学習を行うことができていると、とても充実しています。

授業は今年度もコロナの影響で、オンラインがメインとなり、他学生との交流の機会はなくなってしまいましたが、オンライン授業で時間のできた分をプラスに考えて、様々な活動に挑戦してみたいと思っています。そこで、いろいろな可能性を模索しながら将来を見据えた活動をしていきたいです。

私は周りの人たちや環境に恵まれ、たくさん支えられてきたので、そのことに感謝しこの貴重なキャンパスライフを楽しみながら、勉学に励んでいきたいです。

大学院に進学して

摂食嚥下リハビリテーション学分野 大学院1年
出羽 希



今年度より、新潟大学大学院医歯学総合研究科の摂食嚥下リハビリテーション学分野に入学致しました、出羽希です。この度、大学院入学者として歯学部ニュースへの執筆の機会をいただきましたので、寄稿させていただきます。

私は根っからのおじいちゃん子だったこともあり、入学時より高齢者歯科に興味を持っていました。入学してからもそれは変わらず、日本の高齢化問題の深刻さをより深く感じ、高齢者歯科に携わりたいという思いは強くなりました。私は大学

院に進学するならば、摂リハか義歯科かだろうと早くから考えていましたが、考えを絞ったはいいものの、そこから先の選択に本当に悩みました。先生方、大学院の先輩方から様々お話、意見をいただき、大学一年からAコースの研修期間まで7年間かけ、ようやく摂食嚥下リハビリテーション学分野への進学を決めました。様々考えましたが、訪問歯科を中心とした歯科治療に携わる中で、患者さんや家族の関心事の中に「果たして食事ができるのか」ということが一つ大きなものとして挙げられると思います。この疑問に対し、自分自身が自信を持って答えを出せるようになりたいという思いが当分野への進学を決めた一番の理由でした。

大学院に進学して3ヶ月が過ぎました。臨床実習や、臨床研修で学んだこと、経験したこととまるっきり違う世界に驚き、戸惑いながら臨床の日々を過ごしています。摂食嚥下障害は様々な疾患を背景に生じることから、患者さんを取り巻く様々な職種のスタッフとの連携が必要です。歯科医師の視点では考えもつかないようなアイデアを提案して下さる事もあり、そんな方法があったのかと感動する事もしばしばです。また、リハビリテーションですから患者さんの協力は必要不可欠です。患者さんのキャラクターは頑固な方や、大人しく心配性な方、楽天的な方まで様々ですが、それら患者さんの個性に合わせ時に優しく寄り添い、時に厳しく毅然と接する対応力が求められますが、駆け出しの私には難しく、もっとこう説明できていれば、こう声をかけられたらと反省の日々です。

慣れない生活に苦しみ、疲れる事もあります。この3ヶ月なんとかやってこられたのは私を決して見放さず熱心に指導下さる先生方のおかげです。最後になりますが、私を暖かく迎えて下さった井上教授をはじめ医局の先生方に感謝申し上げます。

入学者のことば

う蝕学分野 大学院1年 齋藤 瑠 郁



8年も新潟大学にいますと、執筆の機会も増えていきます。3回目の今回は、大学院進学までの経緯を含めてお話しします。

長めに振り返って学生時代、座学や模型実習だけでは、歯科医師は人というより歯が相手の仕事のように、と愚痴をこぼした時期がありました。そんな私も、臨床実習、臨床研修を通して、どう考えても歯科医師は人相手の仕事、と十分に実感しています。臨床研修の前半は新潟労災病院口腔外科にて多職種連携の中で診療し、後半は歯の診療科にてマイクロスコープ特訓の毎日でした。これらの研修先は、研修内容というより、誰に学ぶかで選びましたが、結果、素晴らしい先生方のもとで幅広く挑戦できました。非常に濃い時間でした。

研修中、迷惑ばかりの私にも、是非うちへ、と熱心に誘ってくださる先生方がいました。その熱心に押されて進学を選んだ、と言ってもいいくらい熱いお誘いでしたが、当然、それだけで決断したわけではなく、臨床の時間は？生活は？研究は大変？…と、あれこれ悩みました。最終的には、研究や教育への興味に加え、正しい知識と技術を身に付けたい、誘い文句だった“齋藤の可能性”を私も信じてみたいと思い、進学を決めました。

費用面の不安は大学の支援制度で解決できた一方で、臨床から多少なり離れることは今でも気がかりです。とはいえ、病院での診療、学生実習のTA、出張などで、臨床に関わり続けられています。上達を願い、学生や研修医に交じって実習室を借りることもあります。

研究では、微生物感染症学分野に所属しています。免疫学や薬学関連の研究に取り組み、新しいことばかりの毎日を楽しんでいます。失敗に落胆することもあり、つい先日は、初心者にありがちという失敗があり反省したところです。ただ、自

慢にはならない「初心者」の肩書には、何でも吸収し、失敗からより多くを学べる、という良い点があると思います。次へのアドバイスを生かすチャンスが私にはいくらでもあります。う蝕学分野でよく言われる、「臨床のための研究」を、は私の目標でもあります。その実現に向けて、様々なことを習得できるよう精進します。先生方、今後ともご指導よろしくお願い致します。

入学から3か月が経ち、今後の大学院生活をいかに濃い時間にするか、考えています。ご指導くださる先生方、良いプレッシャーをくれる同期、応援してくれる友人や家族、すべての人に恥じぬよう努力し、成長する4年間にしたいと思います。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年

小林 彩 加

この度、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学いたしました小林彩加です。私は、今年の3月に口腔生命福祉学科を15期生で卒業しました。まさか自分が大学院に行きながら歯科衛生士として働くことを選ぶことになるとは、大学入学当時の自分からしたら全く想像できません。働きながら大学院へ通うことなんて自分にできるのか、不安を抱えて入学しましたが、現在では充実した毎日を過ごしています。進学を快くサポートしてくれた家族をはじめ、遠く離れていても切磋琢磨しあえる学部時代の同期たち、引き続き親身になって教えて下さる口腔生命福祉学科の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

私は現在、大学院へ通いながら新潟大学医歯学総合病院で歯科衛生士として働いています。頭頸部癌の既往がある患者さんであったり、インプラントが入っている患者さんであったりと、これまでに自分が処置をした経験がない症例ばかりで戸惑う毎日です。また、学部生時代は、先生の指示通りに動くことを最優先で考えていましたが、現在の臨床の現場では患者さんひとりひとりに合わせて対応しなければならず、自分で考えて行動す

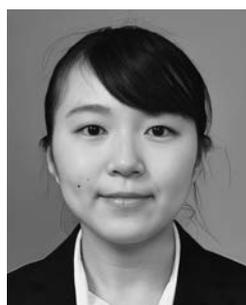
る積極性が求められるようになりました。知識・技術的な面でも、態度的な面でも未だに至らぬ点ばかりですが、入職してから初めてメンテナンスをやらせていただいた患者さんに「すっきりしました、ありがとうございます」と言われたときは報われた気持ちになりました。それと同時に、毎日少しずつですが自分のできることが増えていくことを実感しています。分からないことだらけの新人の私に、一つ一つ熱心に指導して下さる歯科衛生士の先輩方、先生方にはとても感謝しております。

「大学院に行って良かった」と思えるように日々勉学に励むのはもちろんのこと、患者さんからはこの人に任せたい、去年までの自分と同じように実習に来ている後輩たちからはこんな先輩になりたいと思ってもらえるような歯科衛生士を目指します。2年間は間違いなくあっという間に過ぎてしまうと思うので、大学院でも、病院でも自分が興味を持ったことにとことんチャレンジしたいです。日々努力していきますので、これからよろしく願いいたします。

入学者のことは

口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年

宮澤 帆乃花



今年度、口腔生命福祉学専攻博士後期課程に入学しました宮澤帆乃花と申します。出身は新潟市です。口腔生命福祉学科12期生として卒業後、最初の2年間はがんセンターで勤務しまし

た。周術期等口腔機能管理を中心とした業務は歯科だけでなく医科の知識も必要とされ、右も左も分からぬ未熟な歯科衛生士でしたが少しずつその専門性を学ばせていただきました。人の生死に近い仕事に携われたからこそ、人間としても少し成長できたのではないかと思います。短い期間でし

たが非常に貴重で、有意義な経験をさせていただきました。

現在は関東で行政歯科衛生士として働いています。臨床とは異なる業務に最初は戸惑いもありましたが、幅広いライフステージに応じた健康教育や事業の企画立案・運営など、多岐にわたる業務を行えることに日々やりがいを感じています。少数職種であるからこそ、これまでの知識や経験を活かして多職種・多機関との連携を心がけております。

大学院進学を考えた契機は、前職での臨床研究でした。先生方や先輩方にご支援いただきながら学会発表準備を進めるうちに「もっと研究手法や根拠について学びたい」と考えるようになりました。転職してからデータを収集・活用して事業の見直しや更なる展開を行う必要性を実感したこともあり、二足の草鞋を履く決断をしました。社会人大学院生であることに周囲からご心配をいただきますが、自分の気持ち次第で何とかやれるだろうと思っています。思い返せば学部生のときは卒業間近でも臨床実習や就職活動・国家試験対策などと同時進行で乗り越えてきたので、ある程度は頑張れると自負しています。向上心を持って、何事にも前向きに頑張りたいです。

現在は課題を通じて学ぶ機会が多いのですが、英語が苦手な私は論文が読み進められない…と苦戦しています。業務でう蝕や歯周病・オーラルフレイルなど様々な分野に携わっているので、これらの専門知識を深めながら研究を進めていきたいと考えています。仕事と大学院生活を頑張る糧になっているのが、長引くコロナ禍で見つけた趣味である着物の着付けです。息抜きもしつつ日々奮闘しています。

学部生を卒業して新潟を離れていても、再びこのような形でご縁があることを非常に嬉しく思います。自身の学びや研究が今後の歯科口腔保健分野に還元できるように精進しますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。